

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者:80代 性別:男性 介護度:要介護4

病名: 肺炎後廃用症候群 褥瘡

利用サービス:入所

経過: 令和3年6月～令和3年8月の2か月間の入所

転倒からくも膜下出血受傷後失語となった。

コロナウイルス感染症発症後に経管栄養となり3食経口摂取可能となった状態で老健入所となった。

内 容

回復期病棟から当施設に入所された症例 やせ型 褥瘡あり

食事介助の情報として『食べられそうなら自己摂取、40分程度で切り上げる』と送られた。

初回の食事時の観察では、自ら食具を持ち摂取しようと試みるが、上肢機能不全により上手く食べることができずに動作が止まってしまう状態であった。食べる意欲はあるのだと思い、食事介助に入ると、「自分で食べたい」という意思表示あり。手添えの介助に変更すると全量摂取することが出来た。

「自力摂取のみで40分では食事時間がかかるだけで座位姿勢に疲れてしまうのではないか?」「なぜ全量摂取できていないのか?」等の疑問に対しチームで話し合った。

結果、『自力摂取の促しも必要だが、現状としては喫食量を増やし栄養を摂ることを先行し、褥瘡の治療、体力向上に努めるべき』と考えられた。

リクライニング車椅子に変更し食事時のポジショニングを見直した。

自力摂取時間と介助の時間割設定、食具の工夫や間接訓練メニューの作成、離床プラン等体重増加を目標とした計画を立てフロアスタッフで共有した。

食事は、食具のスプーンを把持しやすいように工夫することで、軽く手を添えるだけで口まで運び捕食できるようになった。

15分ほど見守り下で自力摂取していただき、その後は介助にて毎食全量摂取することが可能となった。

多職種での関りにより、約2カ月の入所期間ではあったが、体重は2kg増加した。
リクライニング車椅子での座位は安定し、なかなか改善がみられなかった褥瘡は治癒した。
そして何よりご本人の意思に寄り添うことで笑顔を引き出すことができた症例であった。